

平成22年6月15日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会日本館活用委員会



前号で記した佐久良東雄の歌碑のある善応寺は、一高近くの真鍋坂下に  
あります。旧水戸街道沿いのこの寺は、土浦城の鬼門除けとして藩主の厚い  
保護を受けてきた名刹です。また、街道を挟んだ西側の台地突端には愛宕神  
社の森が望めます。ここはかつて、桜の名所であり、霞ヶ浦を一望できる総  
宜園という景勝地でした。水戸街道を旅した俳人正岡子規もここを訪れ、春  
雨に烟る霞ヶ浦を詠んだ句を「水戸紀行」に残しています。今号では、一高  
脇を通るかつての水戸街道に着目し、本校が誕生する少し前の土浦及びそ  
の周辺の様子を、子規の「水戸紀行」をなぞりながら紹介します。

子規の句碑のある愛宕山の公園  
址からの眺望。(今ではビル群の  
林立で霞ヶ浦はよく見えない)

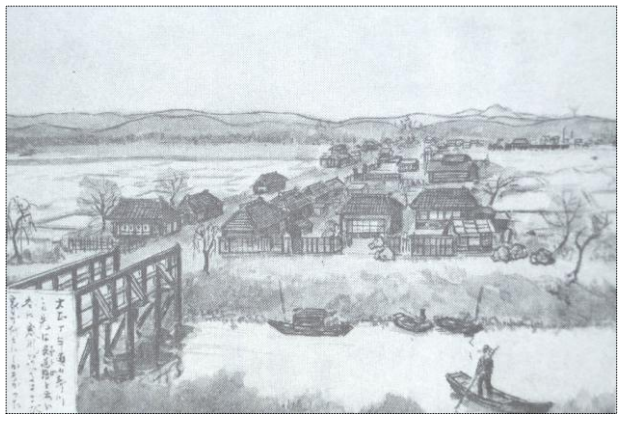
明治22年4月、正岡子規は一人の友人  
を伴って、朝早く東京・本郷を旅立った。  
この時、子規は二十二歳、水戸の親友、  
菊池謙二郎を訪ねるのがこの旅の目的で  
あった。土浦を経て水戸に至る鉄道(後  
の常磐線)が開通するのは明治29年にな  
ってからだから、当然徒歩によるもので  
ある。  
上野を経て千住に至り、松戸までは人  
力車に乗る。車を降り、江戸川を渡った  
松戸は現在のよう大きな町ではなかつ  
た。『松戸驛より一里餘にして小金驛に至る。  
道中の一條まちにて寂々寥々として』とある。  
また、今の柏あたりで昼食を摂ろうとし  
たが、淋しい所で、気の利いた飲食店も  
ないと嘆いている。我孫子の宿屋の客呼  
込みを振り切つて利根河畔に到達。  
『始めて知りぬ、これ坂東太郎とあだ名を  
取りたる利根川とは。標柱を見れば茨城縣と  
千葉縣の境なり。川を渡れば取手とて今迄に  
ては一番繁華なる町なり。』と江戸時代以来、  
渡頭の宿場町として繁栄していた取手を  
記している。  
取手を後にし、『かくて過ぎ行く程に鶯を  
聞きければ、・・・  
鶯の聲になまりはなかりけり  
此のあたりは言語多少なまりて鼻にかかるな  
り。』と鄙びた地の長閑な春の旅を楽しん  
でいる。  
『まだ日は高ければ牛久までは行かんと思  
ひしに、我も八里(一里は約4km)の道に  
くたびれて藤代の中程なる銚子屋に一宿す。  
此驛には旅店二軒あるのみなりといへば其淋  
しさも思ひ見るべし。』当時の藤代は、水戸  
街道の宿駅ではあったものの人口五百人  
余りの寒村であった。  
翌日は朝から小雨が降っていたが、『春  
雨のこと何程の事かあらんと』出立。『野道を



旧水戸街道宿場町の面影を残す現在の土浦・中城通り  
近年、電線を埋設するなど、歴史の小径として  
整備された。

たどること一里、いと大なる沼あり、牛久と  
いふ。(中略)沼は枯れ蘆、枯れ孤のたぐひ多  
く水は深しも見えず、一艘の小舟の雨を侵  
して釣を垂れぬるは哀れにも寒げに、水鳥は  
かしここに一むれ二むれつゝ動きもせず。』  
と今の牛久沼とあまり変わらない景観を  
綴っている。  
牛久驛を過ぎた頃より雨脚は強まった  
が、途中の茶店で一休みして、いよいよ  
土浦へと向かう。荒川沖から土浦にかけ  
ては、やや駄洒落調の文体で『すべる道草  
ふみしめて、雨も嵐もあら川や、つきとなげ  
きの中村を、さまよひたまふ御有様、あはれ  
といふもおろかななり、かゝる苦にあひたまふ  
ともいつかは花もさくら川、土浦まちへと著  
きたまふ。』(太字化は筆者)そして『土浦の  
町は街道の一すじ道にはあらず、少しはあち  
らへ曲がりこちらへ曲がりして家数も可なり  
ありげに見ゆ。』防御上、丁字型食い違い街  
路をなす城下町特有の土浦の街並みをし  
っかりと観察しているのはさすがである。  
『丁度正午なれば書げしたむべき家もが  
なと歩む程にふさはしき處見あたらず、・・・』  
していたようである。風光明媚な地を訪  
ね、趣のある茶屋などで名物料理を食し  
たい。そんな子規の願望が、この紀行文  
の随所から伝わってくる。それなのに、  
旅初日から、まず、昼飯で苦勞している。  
我孫子宿まであと二里もあるという手賀  
沼近くで昼時を迎えてしまった。やっとな  
見つけた食べ物屋で昼食にありついたが、  
店がむさくるしい上、食事も不味くてろ  
くに食べられず、近くにあった芋屋のふ  
かし芋で凌いでいる。藤代の宿屋の晩飯  
も『むさくろしき膳のさまながら晝飯にくら  
べてはつまかりき。』と、いつてはいるもの  
の、決して満足はしていない。それだけ  
に、この街道随一の都市土浦(当時土浦の  
人口は一人余り、隣接する真鍋を合わせた  
と一万三千人余、二万五千人余の水戸に次ぐ  
町)への期待は大きかったに違いない。と  
ころが、この土浦でも思うような食事処  
に有り付けないでいる。あちらこちらを  
捜しまわり、挙句の果てには、怪しげな  
曖昧屋に迷い込み、慌てて逃げ出す始末。  
かなり疲れてはいたが、もう少し先まで  
行ってみようと、車屋にかけあうが、『車  
夫傲然として中々動かず、途方もなき高直な  
ことをいひちらす故、さらばこれまでなり、』  
と、子規は苛立ちを覚えながら土浦を後  
にしている。  
『余等が失望せしことは猶此等の外に一つ  
あり、そを如何にといふに地圖を開きて土浦  
は霞浦に臨むことを知る故、土浦へ行けば霞  
浦は一目の中にあり、飯を食ふにも見晴らし  
のよき家を選んでなど思ひしは空想にて、來  
てみれば霞浦はどこにも見えず』  
子規は、想い描いてきた土浦ではない  
ことに戸惑い、落胆している。  
『土浦を出て一町ばかり行くと左側に絶壁に  
なりたる處ありて石級あり、若しこゝへ登り





土浦と真鍋の境界、新川より真鍋宿を望む（大正期ごろ）  
「スケッチで綴るふるさと土浦」（佐賀進・中27回）より

は霞浦の見ゆるも知れずと石燈數十級を上れば、數百坪もあるべき廣き平地にて處々に茶屋でもいふべき家あり、總巨園といふ額をかかげぬ。思ふに土浦の公園ならん。この断崖に立ちて南の方を見れば果して廣き湖あり向ひの岸などは雨にて見えず、されど霞浦とは問はでも知られたり。』

### 霞みながら春雨ふるや湖の上

相変わらず小雨模様様の天候ではあったが、子規の気分はやつと晴れたようだ。

この眺めのよい高台の公園は、戦前に国道建設工事で削られ、現在は愛宕神社境内の一部が残るのみである。ここに、かつて子規の句碑が建てられていたが、平成に入ったころ、何者かに持ち去られてしまい、句碑を紹介した案内板のみが雑草の中にあつた。

平成21年秋、何とか近代俳句の祖、子規の霞ヶ浦を詠んだ句とその足跡をこの所縁の地に残しておきたいと願う地元有志や子規句碑建立の会によって、土浦の街並みの先に湖を展望できる真延寺境内（愛宕神社の隣）に新たな句碑が再建された。土浦一高の目と鼻の先にある場所である。一度は訪れてみたい。

『水戸紀行』に戻ろう。

『二』を下りてまたいもを求め北に向て去りぬ。筑波へ行く道は左へ曲れと石のたちたるを見過して筑波へは行かず、草臥ながらも中貴、稻吉を経て感心にも石岡迄辿りつき萬屋に宿を定む。』

いも探しの謎はさておき、古い家並みが続く真鍋の坂を登りきると、水戸街道から筑波道への分岐点に至る。現在の本校旧正門前（勿論、本校はまだ存在しておらず、従つて正門も有ろう筈がない）であり、正門の反対側の辻に、道標が立っていた。「左きよたきつくば、右ふちう水戸」と刻まれている。きよたきとは、坂東二十六番札所の清滝観音で、ふちうとは石岡のことである。享保十七年（1732）に建てられたというから土浦では最も古い道標ということになる。



この石の道しるべも戦前の道路工事の際に撤去されてしまい、今はない。（現在、この道標は土浦市立博物館の前庭に移設されている）

子規はこの道標で水戸への道を確認、殆ど人家のない畑地の広がる真鍋台の松並木路を北上した。この十数年後、本校はこの地に産声をあげ、この松木立と共に時を経てきた。卒業生の多くは、校舎に寄り添って聳え立つ松の風景を、母校

の思い出の中に描いている。中26回の東郷正延氏（元東京外国語大教授）は「旧制土浦中学のおもいで」（進修百年）のなかで「私が寮生活を送っていた頃の陸前浜街道（水戸街道がこう呼ばれるようになったのは明治5年以降で、これは水戸街道、岩城相馬街道を総称したもの）は、両側に巨大な松の並木がはるか赤池といわれる方へ続いている。『昼なお暗し』といつてもそれほどオーバーではなかった。それが冬になり、コガラシが吹くようになると、ゴー・ゴーという怒濤の押し寄せるような音をかなでた。寮生活を思い出したに、あの松風のうたがなつかしく心よみがえってくる。』と述懐している。

昭和30年代中ごろまで、この松並木は旧水戸街道の風情を保っていたが、これも国道拡幅工事で伐採されてしまった。本校から北へ1kmほどの赤池から板谷にかけて、国道整備から取り残された旧道がある。ここに辛うじて松並木が生き延びている。日本橋から19番目（20番目という説もある）の一里塚も松並木とともに市指定史跡として保存されている。

『五日朝禱の中にて眼を開けば窓あからみて日影うらゝかにうつれり。昨日にはうつて變りし日和なれば旅心地いはんかたなくつれ

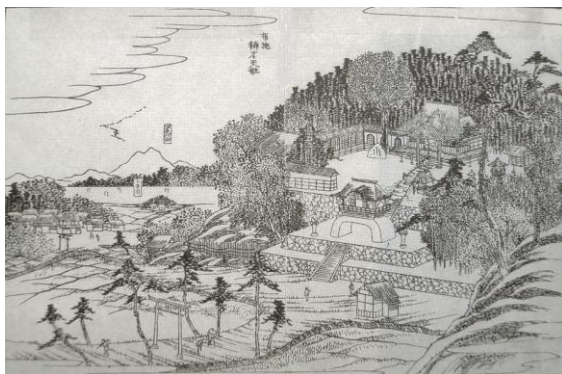


旧街道の面影を残す松並木  
（土浦市若松町付近）

常州路の単調な旅に筑波山の存在はきわめて大きい。道中のどこからでも見える独立峰は、距離と方角の目安となり、歩く程に変化する美しい山容は旅人の旅情を誘い、疲れを癒した。

こうして子規たちはこの日のうちに水戸にたどり着いたが、この水戸も、子規を十分満足させていない。そのあたりの状況については原文に譲りたい。

子規は、後に、この水戸への旅を振り返つて「水戸紀行は失望と落膽とを以て満ち」と述べている。何とも気の毒なことであつた。古い話とはいへ、茨城県人として誠に申し訳なく思う次第である。



布施弁天図（赤松宗旦「利根川図志」より）  
我孫子宿近く、弁天の森の彼方に白帆浮かぶ利根川や筑波山が描かれている。

し。』と好天のなか、子規らは、目的地水戸へと向つた。『筑波山は昨日のけしきに引きかへていとさやかに見られける。昨日より絶えず筑波を左にながめながら行くに、共に山も行く心地して離れさうになし。』

二日路は筑波にそふて日ぞ長き  
あるは雲にかくれるあるは雲のあはひより男體女體のジャンギリ頭と嶋田髭見ゆる處など異なり。』